様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３１３０

研究課題名（和文）中世フランス王国の政治文化ーカペー・ヴァロワ両王朝期の知識人とその作品ー

研究課題名（英文）The political culture of medieval France -Intellectuals and Works of the Capetian and Valois Dynasties-

研究代表者
鈴木　道也（SUZUKI, Michiya）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：５０２９２６３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中世後期（13-15世紀）フランス王国における政治文化の解明を通じて、近代国家生成過程における知と権力の関係を問い直すことが目的である。具体的には、統治観や国家観にかかわる種々の言語的・非言語的表象を分析の対象とし、制作に携わった知的エリートと諸権力体との往還的関係に着目することで、世俗化する知と権力の結託あるいは対抗の諸相を明らかにすることを目指した。結果として、中世後期フランスにおける知識人たちの思想的基盤には前キリスト教的な伝統がキリスト教的な改編を伴わずに存在し、その統治観や国家観が同時代のユーラシア世界を参照系に修正されてキリスト教世界に移入されていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
13世紀ヨーロッパにおける国家的凝集性の高まりは後の近代国家を準備するものであり、主権概念の理論的成立や代表制の制度的展開についてはすでに多くの研究が蓄積されている。しかしこれらを下支えする政治的合意がいかにして形成されたのか、教会勢力を含む諸権力間の「対話=dialogue」、すなわち政治的コミュニケーションの問題について十分な分析が行われているとはいえない。この「対話」の場に、前キリスト教的な伝統がキリスト教的な改編を伴わずに存在していること、またさらにそれが同時代のユーラシア世界を参照系に修正されて政治エリートの統治観や国家観に反映していることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study aims to re-examine the relationship between knowledge and power in the process of the creation of a modern state through the elucidation of the political culture in the late medieval (13th-15th centuries) France. Specifically, I aimed to clarify various aspects of the collusion or opposition between secularizing knowledge and power by focusing on the recurrent relationship between the intellectual elites and the various bodies of power involved in the production of works, focusing on various linguistic and non-linguistic representations of the views of governance and the state. The results show that the pre-Christian tradition existed on the ideological foundations of intellectuals in late medieval France without any Christian reorganization and that their conceptions of governance and the state were transferred to the Christian world through a modification of the Eurasian world of their contemporaries into a system of reference.

研究分野：西洋中世史

キーワード：中世フランス　歴史叙述　政治文化　百科全書　学知　ヴァンサン=ド=ボーヴェ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

当該期のフランス王権は、カペー朝からヴァロワ朝への王朝交代や、イングランド王権との百年戦争など大きな政治的混乱を経験するものの、全体としてはヨーロッパ史における政治的・文化的影響力を飛躍的に増大させることに成功した。それは同時に、王権を核とする国家を理念的にも制度的にも生成・発達させることとなった。当該期についての最新の通史は、言語的、法的にモザイク状態であったフランスが、カペー朝のフィリップ２世治世（1180-）からルイ９世を含んでフィリップ４世治世(-1328)に至る「長い 13 世紀」に超越的王権観を発達させ、次いで 14 世紀から 15 世紀にいたる百年戦争期に、国家として「誕生した」と記す。[Florian Mazel, Féodalités (888-1180), Paris, 2010: Jean-Christophe Cassard, L'âge d'or capétien (1180-1328), Paris, 2011: Boris Bove, Le temps de la guerre de Cent Ans (1328-1453), Paris, Belin, 2010]こうした国家的凝集性の高まりは後の近代国家を準備するものであり、主権概念の理論的成立や代表制の制度的展開については、すでに多くの研究が蓄積されている。しかしこれらを下支えする政治的合意がいかにして形成されたのか、教会勢力を含む諸権力間の「対話=dialogue」、すなわち政治的コミュニケーションの問題について十分な分析が行われているとはいえない。注目すべきは、この時期のフランス王国において、権力観や王国観、あるいは世界観にかかわる新しいタイプの言語的・非言語的表象が数多く生み出され、それらが限られた知的サークルの範囲を超えて広く普及し始めていることである。そこでは、国王、諸侯、都市、法律家、職能団体、兄弟団、そして騎士修道会のそれぞれが、これまでカトリック教会が独占してきた象徴体系に挑戦し、自らの力を確実なものとするべく正当性を競い合っている。具体的には、歴史が（ラテン語ではなく）俗語で語られ、伝統的な TO 図のなかに（聖書的世界とともに）現実世界が描き込まれ、知の体系化を目指した中世の百科全書とも呼びうる作品群が（トマス=アクィナスの『神学大全』と並んで）現れる。フランス政治社会の再編期にあらわれたこうした新しい文化現象を、その生産・機能・普及・受容過程について分析し、知の歴史という観点から当該期におけるディスクール=ノルマティフ（規範的言説）の解析を目指す研究も現れている。[Nicole Bériou, Jean-Patrice Boudet et Irène Rosier-Catach (eds.), Le pouvoir des mots au Moyen Âge, 2014.]

本研究は、こうした研究を参考に、当該期の学知が生み出したこうした様々な作品に込められた権力観や国家観を明らかにし、それらが他との競合（対話）を経て中世フランス王国という現実の国家のなかに一定の妥協点（合意）を見いだす、その具体的な様相を明らかにしたい。

２．研究の目的

本研究では、種々のイデオロギー的作品の分析を通じて、近代国家が生成される長い過程のなかで権力と知がいかなる共存・共犯関係にあったのかを明らかにしたいと考えているが、ヨーロッパ中世の史的展開ならびに研究史に即して考えるならば、具体的に解明すべきは以下の諸点である。

(1)「公開性」：いわゆるグレゴリウス改革を通じて教会のなかには開かれた議論の場が形成されるが、この時点では世俗の側は対応物を持たない。一連の作品が成立する背景には「公」あるいは「公論」を巡る何らかの討議が存在するであろうか。

(2)「言語（俗語）」：ダンテの例をみるまでもなく、当該期の言語表象にあっては記述言語としての俗語の重要性が高まっている。ラテン語から俗語へと変化するなかで、抽象的な概念や理念を共有し得るような円滑なコミュニケーションははたして俗人間に成立したのであろうか。

(3)「リテラシー」：当該期に現れる世界図や百科全書は、伝統的な知のすべてを包摂するかのように膨大な情報量を持ちつつも、一定の体系性を有している。彼らの情報処理技術には、新しい権力観や国家観の構築につながる何らかの理念や原則がみられるのであろうか。

３．研究の方法

上記の目的のもとでフランス王国内で作成された複数の史書（ラテン語および俗語）をとりあげ、言語表象のなかに浮かび上がる王権と諸権力（都市・諸侯・教会）との関係、その変容過程を明らかにしたい（下記(1)、(2)、(5)）。並行して、史書制作の基盤をなす図書室がいかなる支援のもと、どのような構成を以て成立したのか検討する（下記(4)）。さらに、非言語的表象である世界図を対象にその機能を分析する（下記(3)）。一連の作業の後、同時代の他文化圏で編纂された史書をとりあげ、使用言語、構成、内容、普及・再編過程を中世フランスのそれと比較検討する(下記(6)～(7))。

(1)13 世紀後半の初期俗語史書における俗語フランス語の位置

・ポワティエ伯アルフォンスの『ポワティエ年代記』などをとりあげ、関連文献・史料を収集し

つつ、典拠をなすラテン語史書がどのような位置にあるのか、翻訳に際しどのような追記や削除が行われているのか確認する。検討を通じ制作者の意図と「書き換え」の関係を解明する。

(2)13 世紀末から 14 世紀初め、サン＝ドニ修道院における俗語史書の編纂

・この時期は、前代に制作された俗語史書『王の物語』の不振と、ラテン語普遍年代記であるヴァンサン＝ド＝ボーヴェ『歴史の鑑』の好評が対照的であり、その背景を探るとともに、ギョーム＝ド＝ナンジとその後継者たちによる俗語史書<Chronique française abrégée des rois de France>の制作を通じて、物語<roman>であった史書が年代記<chroniques>へと性格を変えていく背景にある当時の人々の歴史観の変化を明らかにする。

(3)「世界図」の制作とその背景

・中世ヨーロッパで広く見られる TO 図とよばれる世界図とはやや異なる形態と内容、例えば同時代史に関する情報を伴った世界図が、当該期のフランス王国で何点か確認されている。キリスト教的世界観にもとづいて普遍的世界全体を図式的に描く一般的な世界図とは異なるこうした世界図を非言語的表象のひとつの例とし、そこに現れる王権観、王国観を考える。

(4)ロワイヨモン修道院における史書編纂事業とその図書館

・上述の『歴史の鑑』は百科全書『大いなる鑑』の一部をなし、この『大いなる鑑』は、古典古代から同時代に至る膨大な数のキリスト教・非キリスト教文献からの引用によって構成されている。これらの文献は王権からの財政的支援を得てフランス北部のロワイヨモン修道院に集められたとされる。この写本収集も知と権力との関係を考えるうえで特筆すべき一大事業であり、その手順・選択・人材・組織・財源・収納方法について実態を明らかにする。

(5)14 世紀前半、ジャン＝ド＝ヴィネによる『歴史の鑑』翻訳

・ヴァロワ朝の成立を受けてフランス王国における史書編纂事業はどのように変化したのか。カペー朝期ルイ９世治下で成立したラテン語史書『歴史の鑑』が、ヴァロワ朝の廷臣ジャン＝ド＝ヴィネによってフランス(語)化する過程を詳細に検討し、国家の枠組みが鮮明化し俗語史書が定着するなか、内容を切り取られ役割を減少させていくラテン語史書がそれまで果たしていた役割について、あらためて確認していきたい。

(6)中世フランスの歴史叙述とラシード=ウッディーン『歴史集成』

・イルハンの宰相ラシード=ウッディーンが第６代イルハンのカザン=ハンの命によって編纂し、14 世紀の初めに完成した『歴史集成』（通称『集史』）は、モンゴルの「民族史」であると同時に、世界の主要民族、国家の歴史や地誌を含む普遍年代記でもあった。中世フランス王国で作成された俗語「王国史」の分析によって得られた知見をもとに、世界 10 ヶ国 16 都市に 72 点の写本を数えるといわれるこの史書をとりあげ、史書の構造を比較検討することで、中世ヨーロッパ人の歴史観が有する個性を検討するための手がかりを得ることを目指す。

(7)中世フランスの歴史叙述と『吾妻鏡』

・13 世紀末から 14 世紀初頭にかけて鎌倉幕府によって編纂された編年体史書の『吾妻鏡』は、1180 年の以仁王の挙兵から 1266 年に将軍宗尊親王が送還されるまでを扱っている。収集された史料を切り貼りして編纂者が加筆を施すその編集方法において中世フランスの史書と類似している反面、同時代の種々の文体をそのまま採録するなど独特の形式も有している。編者をはじめいまだ明らかになっていない点も多く分析には困難が予想されるが、『集史』に次いでこの『吾妻鏡』も検討の対象に加えることで、前近代のユーラシア地域における歴史意識の総体的把握を試みたい。

４．研究成果

(1)2016 年度：主として二つの作業を行った。ひとつは、「百科全書の時代」である 13 世紀を代表する知的エリートであった学者ヴァンサン=ド=ボーヴェの創作活動を通じてカペー王朝期フランス王権と知的エリートの関わりを考えるものであり、もうひとつは、14 世紀末から 15 世紀初めにかけての教会分裂期にパリ大学の総長として活躍したジャン=ジェルソンの生涯をふり返ることで、当該期の学権と王権（ヴァロワ王権）、教権との関係を明らかにしようとするものである。前者として具体的には、ヴァンサンが編集した二点の政治的著作および彼の主編著である『大いなる鑑』の構造分析を行った。得られた結論は以下の通りである。すなわち、13 世紀を代表する百科全書的作品である『大いなる鑑』をまとめあげたドミニコ会士ヴァンサン=ド=ボーヴェは、「内容は古いが新しい形でそれを示す」との意気込みをもって旺盛な編集・創作活動を展開していた。その活動は、ルイ９世をはじめとするカペー朝の王族たち、そしておそらくは托鉢修道会系の修道士を多く抱える廷臣集団とも緊密に結びついていた。彼の編集作業は、基本的にはキリスト教的世界観を上位に置きながら、そこに古典的な、あるいは世俗的な知的情報を統合・調和させていくものであったが、出来上がった彼の作品は、『大いなる鑑』においても、またそこから派生した政治的著作においても、彼あるいは王とその周辺の意図に沿って、ときに一定の方向性を与えられている。膨大な知を体系化し必要に応じて国政の場に提供するという点において、百科全書編者たる彼の果たした役割は大きかった。後者は、現段階では予備的な作業

にとどまっており、ジャン=ジェルソンが記した膨大な著作（書簡・説教・論文・建白書・講義録）を整理し、それをもとに彼の生涯を再構成したところである。

(2)2017 年度：主として二つの研究活動を行った。ひとつは研究史の整理である。中世のフランス地域を対象としてここまで進められてきたいくつかの主要な研究成果を紹介しつつ、その背後にある問題関心、具体的な研究手法の変遷を辿るたどることで、フランス中世史研究の現状を確認し、いわゆる政治文化研究の可能性について考察した。結果として、近年のフランス中世史学界には、ジョルジュ=デュビーのように、ヨーロッパにとどまらず広く世界全体の中世史研究全体に影響力を発揮するような指導的な中世史家は現れていないが、個々の中世史家たちの活動を辿っていくならば、とくにパリ第一大学のスタッフを中心とする共同研究の積み重ねにより、1980 年代以降、政治文化の解明を目指して政治史研究に関する膨大な成果が蓄積されてきたことが確認された。この成果は論文「中世の政治文化をめぐって－中世フランス政治史研究の現状－」にまとめ、学内の紀要で公表した。もうひとつは中世叙述史料の分析である。13 世紀後半から 14 世紀前半のフランス王国、すなわちカペー朝後半期から王朝交代を経てヴァロワ初期に至る時期の王権およびその周辺の人々が思い描いていた統治者像について考察するため、王家から直接依頼を受けて翻訳活動を展開していた聖ヨハネ騎士修道会士ジャン=ド=ヴィネの代表作ともいえる『歴史の鑑』を対象とし、とくにそこに収められたアレクサンドロス大王の物語に焦点をあて、アレクサンドロスの描かれ方、ラテン語から俗語への翻訳のされ方について考察した。ジャンのテキストを読む俗人たちのなかで像を結ぶアレクサンドロスは、古代世界の具体的な現実から切り離され、彼らが生きる社会と親和性の高い、理想的でありながらきわめて中世的な統治者の姿であった。この成果は論文「『歴史の鑑』のなかのアレクサンドロス大王」にまとめた。

(3)2018 年度：『歴史の鑑』をはじめとする 13 世紀の百科全書のなかのイスラーム世界についての記述がカトリック圏、とくにフランス王国の知的エリートの思想形成に与えた影響を考えるための予備的作業を行った。これら中世の百科全書のうち何点かは最近デジタルデータベース<SourcEncyMe>にも収録されており、研究環境は大きく改善している。

(4)2019 年度：当該研究領域の先駆者として、1980 年代以降の中世フランス政治文化研究を牽引してきたベルナール・グネの遺作 Bernard GUENEE, Comment on ecrit l'histoire au XIIIe siecle Primat et le Roman des roys（邦題『13 世紀に歴史を書くということ-プリマと『王の物語』』）, Paris, CNRS Editions, 2016 の翻訳作業を、昨年度に続いて実施した（『東洋大学文学部紀要』に公表）。本書は、中世ヨーロッパにおける史書編纂事業の背景にある当時の知的状況や政治思想を見事に描き出しており、知的クラスターとしてのサン＝ドニ修道院の役割と限界を知ることができる。なお、こうした研究活動を踏まえ、最新の知見を社会に提供することを目的として、最近刊行された以下の教科書や概説書にも寄稿した。平野千果子編著『新しく学ぶフランス史』（ミネルヴァ書房、2019 年）[第 1 章「フランス史の時空間」を担当]、金澤周作監修『論点西洋史学』（ミネルヴァ書房、2019 年）[第 2 章 20 節「歴史と記憶」を担当)、中野隆生・加藤玄編『フランスの歴史を知るための 50 章』(明石書店、2019 年）[第 6 章「「長い 13 世紀」とフランス王国―王権の伸長と王領地の拡大―」を担当]

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 鈴木道也	４．巻 44
２．論文標題 翻訳 13世紀に歴史を書くということ ： プリマと『王の物語』(1)	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東洋大学文学部紀要．史学科篇	６．最初と最後の頁 284-243
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木道也	４．巻 45
２．論文標題 翻訳 13世紀に歴史を書くということ ： プリマと『王の物語』(2)	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東洋大学文学部紀要．史学科篇	６．最初と最後の頁 330-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鈴木道也	４．巻 22別冊
２．論文標題 政治文化研究の現在 ： 中世フランスの象徴と権力（特集 社会史を再考する）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東洋大学人間科学総合研究所紀要	６．最初と最後の頁 115-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Michiya SUZUKI	４．巻
２．論文標題 Louis IX, justice royale et L'enquete	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Hypotheses 2017 Travaux de l'ecole doctorale d'histoire	６．最初と最後の頁 34-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木道也	4．巻 43
2．論文標題 中世の政治文化をめぐって－中世フランス政治史研究の現状－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東洋大学文学部紀要史学科篇	6．最初と最後の頁 318-293
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 MIchiya SUZUKI	4．巻
2．論文標題 Vincent of Beauvais and Alexander the Great	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Proceedings of The 8th International Conference on the Medieval Chronicle	6．最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木道也	4．巻 42
2．論文標題 中世の百科全書とフランス王権	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東洋大学文学部紀要史学科篇	6．最初と最後の頁 192-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鈴木道也	4．巻 261
2．論文標題 特集《古典再読》マルク・ブロック著『封建社会』再読	5．発行年 2016年
3．雑誌名 西洋史学	6．最初と最後の頁 73-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 鈴木道也
2．発表標題 テーマ報告　法を使う・紛争文化　川島翔報告・神野潔報告へのコメント
3．学会等名 法文化史学会
4．発表年 2017年

1．発表者名 鈴木道也
2．発表標題 中世ヨーロッパの自然観　ー13世紀の百科全書からー
3．学会等名 国際哲学研究センター研究会
4．発表年 2017年

1．発表者名 Michiya SUZUKI
2．発表標題 Vincent of Beauvais and Alexander the Great
3．学会等名 The 8th International Conference on the Medieval Chronicle（国際学会）
4．発表年 2017年

〔図書〕　計3件

1．著者名 平野　千果子	4．発行年 2019年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 362
3．書名 新しく学ぶフランス史	

１．著者名 松本　尚子	４．発行年 2019年
２．出版社 国際書院	５．総ページ数 300
３．書名 法を使う/紛争文化（法文化(歴史・比較・情報)叢書）	

１．著者名 金澤　周作、藤井　崇、青谷　秀紀、古谷　大輔、坂本　優一郎、小野沢　透	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 340
３．書名 論点・西洋史学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考